

尻屋地先磯根資源調査 (要約)

長根 幸人・佐藤 康子

尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

試験研究方法

2004年6月8日に、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け(図1)、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計74調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。

調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計107個については、生殖腺重量を測定し、身入りを求めた。

結 果

1. 2年目マコンブ

2年目マコンブは、平均4.62本/m²生育し、前年に比べ約8倍、前々年(2002年)とほぼ同じ密度となった。水深別に見ると、水深5m地点で11.07本/m²、2.5m地点で8.57本/m²と多く、一方、水深20mの全地点及び15mではライン13を除いて皆無となった。したがって、2004年漁期のコンブ漁獲量は、昨年に比べ増加し、一昨年と同等若くしはそれ以上が期待された。

2. 1年目マコンブ

1年目マコンブは、表1のとおり、各水深とも前年よりかなり低い密度で生育し、調査点平均では2.7本/m²となった。水深別では、10m地点で8.0本/m²、25m、5m、15mでは2本/m²前後、20m地点では皆無となった。最近の10年間では1995年に次ぐ2番目に低い値となったため、2005年漁期のコンブ漁は本年に比べ大幅に低減すると予測された。

3. エゾアワビ

省 略

4. キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、調査点の85.1%に相当する63地点から採取され、平均の生息密度が2.16個体/m²、現在量が296g/m²となった。調査点全域の77%から平均1.85個体/m²、316g/m²の生息が確認された前年に比べ、個数が17%増加、現存量が27%減少し小型個体の比率が増加した。ここ10年間の平均密度(2個体/m²、339g/m²)には大きな変化がなく、キタムラサキウニが高密度に生息する状況が続いていると言えた。キタムラサキウニは、100g/m²以上の密度で生息する場合、マコンブが発生・

発表誌：平成16年度尻屋地先磯根資源調査結果報告書。青森県水産総合研究センター増殖研究所、
平成16年7月

生育しにくくなることが知られている。キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、引き続き、その生息状況に注視すると共に、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要があると考えた。

キタムラサキウニの身入り（生殖腺指数）は6調査線上の21地点を調べた。その結果、2.5-10mでは17%以上と漁獲価値の高いキタムラサキウニが生息するとみなされたが、15-20mではここ3年間で最も低い5.8-4.4%であった。

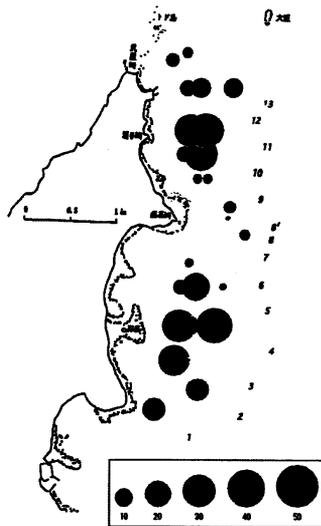


表1 2年目マコンブの水深別の生育密度

水深	2004年	2003年
2.5 m	8.57 本/m ²	0 本/m ²
5 m	11.07 本/m ²	0.93 本/m ²
10 m	3.93 本/m ²	0 本/m ²
15 m	0.86 本/m ²	1.01 本/m ²
20 m	0 本/m ²	0.62 本/m ²
平均	4.62 本/m ²	0.58 本/m ²

図1 2004年6月の尻屋沿岸における2年目マコンブの生育分布（本/m²）
（図中の数字は調査線の番号を表す）

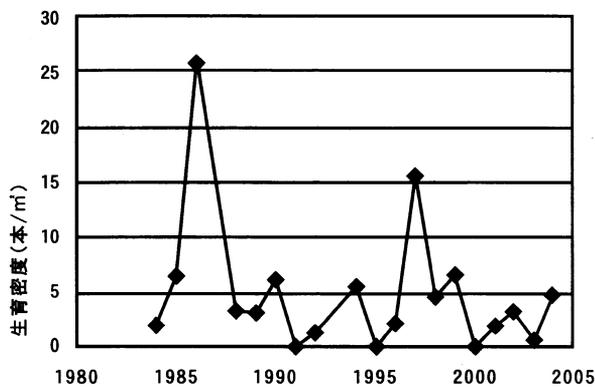


図2 1984年から2004年までの尻屋地先の2年目マコンブの生育密度変化